

2024年度 第3回森と水の源流館 授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2024年9月7日(土) 10時~12時
- ◇開催方法 ZOOMによるオンラインセミナー
- ◇参加者 島(七隈小)、米本(雲雀ヶ丘学園小学部)、河野(大分大学)、上園(鹿屋市)、尾上・古山・上西・木村・成瀬(森と水の源流館)
大西・中澤(奈良教育大学) 11名

◇内容

1. 奈良学園中学校・高等学校の実践紹介(原先生は校務のため、小山さんが代わりに発表)

里山をつかった環境教育に取り組んでいる

中学校: しいたけ植菌

高等学校: 棚田での稲作実習、希少生物の研究(ゲンジボタル・赤ガエル・サギソウなど)

→ スーパーサイエンスハイスクールの指定を受ける

・森・里・海の連環の考え方を導入する(高校2年生)

森: ブナとヒトの共生研修

里: コウノトリとヒトの共生研修

海: 北限サンゴの保全研修

→ それぞれが個別に取り組んでいた(つながりの視点が不足)・単発研修

森・里・海のとつながりに着目させる研修

研修内容を自分事化できる取り組みに 歴史から学ぶ必要があることに気づく

歴史から学ぶ: 現状の当たり前をクリティカルに問い直す

・昔はどうであったのか

・なぜ変わってきたのか(過去の課題克服から学ぶ、姿勢・組織・意欲)

「歴史の証人」・林業に関する内容、治水に関する内容、使って残す・保全する

林業の現場を体験させる、林業家に出会わせることで自らの進路の決定にも影響

「吉野川・紀ノ川源流学研修」に取り組む

森: 水源地の森での吉野林業の体験

五感で学ぶ体験的な活動を重視、村民との出会いを重視

天然林と自然林の比較から「管理とヒトとの共生」を考える

里: 近畿農政局での配水や治水に関わる研究

海: 和歌山県農林水産部水産局・漁民の森づくりの活動を調査

「吉野川・紀ノ川源流学研修」計画

森・里・海の双方に影響を与え合う・つながりを見出す取り組み

森: 和歌山県立森林公園 根来山げんきの森の取組

里: 和歌山県立紀伊風土記の丘 製塩の歴史と製塩土器

海: 奈良「柿の葉寿司」文化 紀州産のサバと塩を使って

【意見交流】

・「めぐみ」をテーマにしてはどうか。めぐみをもたらす要素に着目させることで、それが受け継がれてきていること、受け継ぐためのシステムや人々の意識と行動があることに気づかせる（偶然残っているのではない）。今後も受け継がれていくだろうか？そのためにしなければならないことは何だろうか？を考えさせる。

・つながりの具体は想定されているか？

例えば柿の葉寿司

海：サバ、里：塩、森：山の神様のまつり

- ・紀州のサバの漁獲量の推移 温暖化の影響は？
- ・今も紀州産の塩が使われている？使われていないならその原因は？
- ・山の神様の祭りはこの先も継続できそう？ 林業不振 人口減

課題が明らかにできることで、課題解決を目的とした探究的な学びが始動する。

・自分事にすることが難しい。この単元で出会う方々は、生徒にとって身近な具体と言えるのか？

2. 小学校6年生総合「鹿屋市 PR プロジェクト」(上園先生)

昨年度までの取組

- ・台北の小学生と交流していた。互いにお国自慢をして終わっていた（黒豚がおいしい、白熊アイスクリーム、温泉、桜島など）。探究的な学習になっていない。
- ・平和学習：鹿屋基地「私たちが最後の戦争体験者であってほしい。」

今年度2学期

- ・ふるさと納税に着目する 鹿屋市のふるさと納税額は35億円 年々増えている（ただし去年は減）
→ 鹿屋市をPRして、納税額を増やしたい
- ・まとめて発表して終わり、にはしたくない。
- ・鹿屋市役所のふるさとPR課の話を知ろう 鹿屋100チャレ
野菜価格の下落による収益・納税額の低下
→ 私たちにできることはないだろうか
- ・取組に対するフィードバックをもらうことで、児童の意欲ややりがいが増える
しかし、保護者からのフィードバックでは育たない(← がんばったね。よかったねで終わっている)
奈良女子高等学校と交流して、発信方法の洗練化を図る V6 動画の作成

【意見交流】

・ふるさと納税の返礼品に児童の作った鹿屋市のPRパンフレットを入れては。きっとフィードバックがもらえる。

・PRパンフレットにQRコードを貼り付けるとフィードバックが増えるだろう。

・学習の目的が経済方面ばかりにならないように。ふるさと納税が森林の保全などにも使われていることを伝える。

・戦後の鹿屋市から現在の鹿屋市に発展できたのは一般の人々の努力があったことを伝え、未来の鹿屋市のために、自分たちは何をすべきかを考えさせる。